

直喩標識としての「じゃないけど」

—談話における直喩とアナロジーの再考に向けて—

岡本雅史

立命館大学

1. はじめに

旧来の認知言語学の立場では、直喩（シミリ）は認知プロセスとしての「メタファー」の名のもとに隠喩と共通の認知メカニズムを有するものとして捉えられ、その特異性を問題にする機会はそれほど多くなかった。例えば鍋島（2016）では、直喩と隠喩がいずれも写像と融合で記述できることなどから、直喩はメタファーの一種であり、両者のあいだにはメタファーらしさやメタファーの明示性の度合いがあるだけであるとされる（鍋島 2016: 253-286）。それに対し、小松原・田丸（2019）では、中村（1977）や山梨（1988）が指摘する直喩の指標表現の多様性に着目し、直喩における指標の働きを「写像方略」と捉えてその類型化を試みている。彼らの分析は指標が言語的に表す関係と比喩写像（metaphorical mapping）との関係を新たに問題にしている点で示唆に富むものである。

しかしながら、直喩を隠喩との対立軸で捉えるだけでは抜け落ちてしまう側面がある。それは、直喩や隠喩といった比喩表現としての言語形式が確立する以前に、比喩写像の基盤となる認知プロセスである「アナロジー」自体が有する否定的側面である。つまり、XをYで喩えるという認知的な見立ては、XとYの類似性や共通性に焦点を当ててはいるが、その前提として $X \neq Y$ であるという両者の「相違」を不可避に孕んでいる。比喩写像を基にした議論は、しばしば起点領域と目標領域の間の写像に基づく類似関係に拘泥し、アナロジーがもつこうした潜在的な否定性が等閑視されやすい傾向にあった。

こうした問題意識から、本稿では、①「じゃないけど（ではないが）」を中心とした否定的直喩標識に着目することで、アナロジーの否定的側面がどのように言語化されるのかを観察するとともに、②そうした否定的側面がプロファイルされるコミュニケーション的基盤を、実際の日常会話の談話シーケンスの分析によって浮かび上がらせることを目的とする。

論文の構成は以下の通りである。まず2節で直喩と隠喩が先行研究においてどのように捉えられてきたかを概観し、旧来の直喩研究の問題点を指摘する。3節では書き言葉における「ではないが」に主な焦点を当て、直喩と譲歩表現の連続性を示す。4節では話し言葉における「じゃないけど」に着目した事例分析を通じて、日常会話において否定的直喩標識が使用される認知的・相互行為的基盤を論じる。続く5節で分析結果と考察をまとめ、6節で本稿の結論と展望を述べる。

2. 直喩と隠喩

そもそも直喩は、数多あるレトリック表現のなかでも基本的なものと考えられてきた。例えば本邦におけるレトリック研究の泰斗と目される佐藤信夫は、有限の語彙を使って無限のものごとを表現するための工夫を「ことばのあや」として捉え、そうしたあやのうちで最も基本となる型が「直喩」であると明言している（佐藤 1978: 48-49）。佐藤の定義によれば、直喩は「ものごとの様子を表現するために、「XはYのようだ」、「YそっくりのX」……というぐあいにととる形式」（*ibid.*: 50）である。このとき、XとYの間にもともと存在している類似性に基づいて直喩（や隠

喩)が成立すると考える古典的なレトリック論に対し、佐藤はそれを逆転させ、《直喩によって類似性が設定される》のだと主張する。後述するように、この点が直喩が基盤とするアナロジーの否定的側面に関わる重要な論点となる。

一方、認知言語学の立場では、Lakoff & Johnson (1980) を嚆矢として、メタファーを狭義の「隠喩」というレトリック表現ではなく、2つの異なる領域間の写像プロセスからなる概念的現象であるとみなすのが主流となっている (Cf. Aisenman 1999: 46)。そのため、直喩と隠喩の区別はあくまで言語表現上の比喩標識 (または直喩標識) の有無に矮小化され、両者に通底する認知プロセスのみに焦点が当てられてきた。例えば鍋島 (2016) においても、直喩と隠喩がいずれも写像と融合で記述できることなどから「シミリはメタファーの一種であり、メタファーらしさ、およびメタファーの明示性の度合いがあるだけと考える方が合理的である」 (ibid.: 284) と主張されている。この主張の妥当性はさておくとしても、その結果として、認知言語学的な分析においては直喩のみが有する比喩標識についての考察が不十分となっていたことは否めない。

それに対し、小松原・田丸 (2019) は、中村 (1977) や山梨 (1988) が指摘する直喩の指標表現 (ここでいう直喩標識) の多様性に着目し、直喩における指標の働きを「写像方略」と捉えた上でその類型化を試み、直喩の指標が言語的に表す関係と比喩写像との関係を新たに問題にしている点で興味深い。特に、「Xのような/にY」という直喩表現においてこれまでプロトタイプ的に想定されてきたXとYの直接写像方略 (例: 吐き出す(X) ように言った(Y)) よりも、「狸(X) のような眼(Y)」のように、XとYが間接的に写像関係を結ぶ例示方略の方が多数を占めていることを明らかにした点は、統語的な直喩研究の新たな方向を示している。

しかしながら、従来の直喩研究には未だに2つの限界がある。ひとつは、直喩の機能として「写像」を重視し過ぎるため、喩えるもの (ベース) と喩えられるもの (ターゲット) との間の類似性や共通性以外の側面が無視されやすいことであり、もうひとつは、単文を中心とした分析が主となるため、基本的に文や節・句レベルの関係しか捉えられず、談話レベルの認知方略としてのアナロジーとの関連性が不明な点である。本研究では前者をアナロジーの否定的側面として議論の俎上に載せ、後者を日常会話における実際の談話例の事例分析によって明らかにする。

Holyoak & Thagard (1995) は、彼らが提唱する「アナロジーの多重制約理論」の中で、ベースにおける全ての要素がそれぞれターゲットの唯一の要素に対応し、その逆も成立するような「一対一対応付け」の成立はベースとターゲットの同型性を保証する条件の一つであるが、必ずしもアナロジーに必須のものではなくソフトな制約であると述べている。つまり、ベースとターゲットが完全に同型であればある意味で完全なアナロジーと言えるが、その場合は創造的な飛躍が起こる可能性がない。なぜならば、アナロジーが完全であることとそのアナロジーによって生成された推論の有用性はトレードオフの関係にあるからである (邦訳書: 53)。同様に哲学者Beckerも法的推論に関するアナロジーにおいて、明けの明星と宵の明星のように2つの対象が同一である場合には定義上アナロジーであるとは言えないと主張する (Becker 1973: 249)。

このようなベースとターゲットの非同一性としてのアナロジーの本質的な不完全さは、アナロジーを用いたレトリックとして直喩を用いる場合にのみ顕在化するというのが本稿の主張のひとつである。つまり、隠喩と異なり明示的にそれがアナロジーであることを指標する直喩においては、ベースとターゲットの類似性や共通性に主眼を置きつつも、言語的に両者の非同一性をプロファイルすることが可能となる。本稿では、そうしたアナロジーの潜在的な否定的側面をプロファイルする直喩標識として「じゃないけど (ではないが)」を取り上げ、書き言葉と話し言葉に

おける当該表現の振る舞いの差異の観察から、書き手ないしは話し手がどのような動機づけのもとにそうした「否定的直喩標識」を用いるのかを検討する。

3. 書きことばにおける否定的直喩標識

中村(1977, 1991)は直喩表現に係る比喩指標要素を以下の7種類に分類し、その中の82種、計357の要素を収集してそれぞれ実例を挙げている。

- 動詞類：「感じる」「紛う」etc.
- 副詞類：「まるで」「なんだか」etc.
- 助詞類：「ほど」「でも」etc.
- 形容詞・形容動詞・助動詞類：「等しい」「同然」「ごとし」etc.
- 名詞類：「代物」「心地」etc.
- 連体詞・接頭辞類：「へたな」「ある種の」「小...」etc.
- 接尾辞類：「...ばり」「...級」etc.

このうち、本稿で取り上げたい否定的直喩標識「ではないが」（ないしはそれに類する表現）は副詞類に分類され、以下のような用例が示されている(中村 1977: 223)。

- (1) マアテルリンクじゃありませんが、人生の幸福はやっぱり翼のある青い鳥じゃないでしょうか。(岡本かの子『母子叙情』)
 - (2) 芝居の伊左衛門ではござりませぬが今宵はその掛け行灯の暗い灯が、なにやらもの言うてるように思われましてなァ。(宇野千代『おはん』)
- (太字・下線は引用者による。以下同様)

中村の収集した膨大な事例においても上記の2例しか示されていないことから、否定的直喩標識がこれまで注目されてこなかった理由のひとつとしてその出現頻度の少なさが挙げられるだろう。そこで、本研究では、より多くの事例を収集するためにコーパスを用いることとする。

まず、書き言葉の分析データとして、主に小説などが収録されている『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』(新潮社)を使用した。テキストデータに変換し、表記ゆれを含めて以下の4種類の表現を文字列検索した結果、全部で802例を抽出することができた。

- a. 「ではないが」
- b. 「ではないけど」
- c. 「じゃないが」
- d. 「じゃないけど」

このうち最も多く出現したのがaの「ではないが」で444例、続いてcの「じゃないが」が303例で、この2つで93%を占めている。ただし、後で検討するように、これら全てが本稿で取り扱う否定的直喩標識であるとは言えない。特に、上記の表現の直前に「わけ(訳)」や「つもり」が接続しているものは直喩とみなし難い例が多かった。

- (3) 言いわけをするわけではないが、私はそれほど多くの女に対して好感を抱くわけではない。どちらかといえばあまり抱かない方だと思う。(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)
- (4) かわいがったのを恩に着せるではないが、もとを云えば他人だけれど、乳呑児の時から、民子はしょっちゅう家へきて居て今の政夫と二つの乳房を一つ宛含ませて居た位、お増がきてからもあの通りで、二つのものは一つ宛四つのものは二つ宛、着物を拵えてもあれに一枚これに一枚と少しも分け隔てをせないできた。(伊藤左千夫『野菊の墓』)

上記の例では、いずれも一種の「譲歩」を表す表現として用いられていると考えられる。つまり、(3)ではこれから「私」が述べようとするのが言い訳として捉えられるかも知れないことを先回りして述べており、(4)でも語り手は、乳児の頃から血の繋がらない子どもを実の家族同様に慈しんで育ててきたことを率直に述べるために、前もって聞き手に「恩着せがましい」と受け取られないような配慮を行っていると言える。したがって、通常はこれらを比喩とみなすことはない。しかしながら、次のような例ではどうだろうか。

- (5) とにかく日本人は恋を軽蔑しすぎている。仲田ではないが、恋する男に娘をやるよりは見ず知らずの男に娘をやることを安心と心得ている。(武者小路実篤『友情』)
- (6) 何事もおぼしめしそのままなる人生だ。えらそうな事を考えてみたところで、運命には抗しがたい。昔男ありけりではないが、ああ、あんな事もあった、こんな事もあったと、暗い窓を見ていると、田園の灯がどんどん後へ消えてゆく。(林芙美子『放浪記』)
- (7) パスカルではないが、我々が尋常な社会生活を営んでいる時はいつも何か、我々の気を紛らせてくれるものがある。(吉田健一による『野火』の解説)

(5)では主人公の友人である仲田を例に挙げ、彼にも共通する、日本人の恋に対する性向を非難している。また(6)では「むかし、おとこありけり」という『伊勢物語』の一節を引用して、自身の人生を振り返るさまを喩えている。一方、(7)は小説本体ではなく解説文中の表現であるが、『野火』を読んだ解説者が、パスカルの有名な『パンセ』のテーマの一つである「気晴らし」を想起したことが示唆されている。これらはいずれも「のように」等の通常の直喩標識に交替可能であり、その意味で「直喩」を表す表現として用いられていると考えられる。

ここで注意が必要な点が2つある。ひとつは、(5)-(7)の例がいずれも、後続する内容(Y)と類似しているXを例示しながらも、「Xではないが」と明示的に否定しているという点である。これを「否定的直喩標識」と名付け、その動機づけとしてこの点を考察すると、当該表現を用いる書き手ないし語り手は、通常の直喩表現のように $X \equiv Y$ という「類似」を前景化するのではなく、むしろ $X \neq Y$ という「相違」の方に焦点を当てているように見える。しかしながら、XとYが全く異なるものであればそもそもそうした例示を行うことはないはずであり、少なくとも $X \equiv Y$ という「類似」が読み手や聞き手に伝わることも含意として意図されていると言えるだろう。

もうひとつは、上記の例が小松原・田丸(2019)のいう「例示方略」の一種とも捉えられる点である。つまり、《Xではないが、Y》という構文スキーマを仮定すれば、XとYが直接的な写像関係にあるのではなく、XがYの(広い意味での)一例となっている可能性は無視できない。これから述べようとするYの「例示」としてXに言及していると考えれば、否定的直喩標識において実際

に否定されているのは「XがYの例である」ことではなく、「XだけがYの例である」ことかも知れない。この点も否定的直喩標識が用いられる動機づけとして考慮に入れる必要がある¹。

ここにおいて、改めて《Xではないが、Y》という構文スキーマを観察すると、先に「譲歩」表現とみなした(3)(4)の例も、これから述べる内容が類似しているものを否定することで、読み手や聞き手の推論を先回りして述べるという動機づけが存在していると捉えることが可能である。(3)では後続する内容が「言い訳」に極めて類似しているがゆえに、そのように受け取られることを事前に否定しているのであろうし、(4)でも同様の推論プロセスが書き手や語り手に認められる。したがって、少なくとも上記の例では、《Xではないが、Y》という構文スキーマではX≡Yという「類似」とX≠Yという「相違」の2つの認知的意味がせめぎ合っているため、「譲歩」表現と「比喩」表現が連続体を成している可能性が示唆される。ただし、以下の(8)のような例では「類似」の意味がほとんど感じられず、今回収集した事例の大部分がこのような通常の譲歩表現と考えられることを付記しておく。

- (8) 僕は、その頃、モオツァルトの未完成の肖像画の写真を一枚持っていて、大事にしていた。それは、巧みな絵ではないが、美しい女の様な顔で、何か恐ろしく不幸な感情が現れている奇妙な絵であった。(小林秀雄『モオツァルト』)

4. 話し言葉における否定的直喩標識

前節で見たように、書き言葉における否定的直喩標識「ではないが」の事例はそれほど多くなく、一部は比喩表現との連続性を示しているものの、多くの場合は通常の譲歩表現として解されるものが多かった。そこで本節では、日常会話場面の話し言葉で用いられる否定的直喩標識「じゃないけど」を観察することで、談話レベルでのアナロジーの様態と動機を明らかにする

日常会話場面での話し言葉を調査するために、分析データとして『日本語日常会話コーパス』モニター公開版(国立国語研究所)を使用した。このコーパスは、性別・年齢などのバランスを考慮して選別された協力者に機材機器等を2、3か月ほど貸し出し、協力者の日常生活で自然に生じる会話を「個人密着法」と呼ばれる、協力者自身による記録方法を用いて収録されたものである(小磯ら 2019a, b)。本研究では、2018年12月に50時間分のデータが公開され、2022年度末まで利用可能なモニター公開版(以下、CEJCモニター版)を用いる。以下では、本コーパス中で比喩表現として「じゃないけど」が用いられている断片をいくつか取り上げて事例分析を行うことにより、日常会話という話し言葉による談話の中での否定的直喩標識の振る舞いを観察する。なお、以下に引用する談話の各断片の転記テキストは筆者によって一部の不要なタグが除かれている²。

4.1. 断片1: 「定例会じゃないけど」

T016_003 (432.7-469.3) 自宅で夕食後に妻とくつろぎながら雑談(2名)

| | | | | | | | |
|-------|-------|-----|-----------------------------------------|-------|-------|-----|-------------------------------------------|
| 432.7 | 433.7 | 慎吾 | でも 何人ぐらい来てたの。 | 451.0 | 456.2 | 理奈子 | 何人がいて:(D スー) (F その) なんか (F その) 定例会じゃないけど。 |
| 434.3 | 435.7 | 理奈子 | 何人ぐらいいたかな。 | 452.2 | 452.4 | 慎吾 | うん。 |
| 438.6 | 439.5 | 理奈子 | 三十人?。 | 456.2 | 456.4 | 慎吾 | うん。 |
| 440.0 | 440.1 | 慎吾 | え。 | 456.3 | 458.5 | 理奈子 | 毎回やって。 |
| 440.1 | 440.6 | 慎吾 | そんないたの?。 | 462.1 | 462.4 | 理奈子 | これ。 |
| 440.8 | 440.9 | 理奈子 | いや。 | 465.0 | 469.3 | 理奈子 | それ以外に たぶん (F その:) 毎回来てる人たちがいるん:じゃないかな。 |
| 440.9 | 441.7 | 理奈子 | いた いた いた。 | | | | |
| 442.7 | 450.5 | 理奈子 | きょうのゲストってゆうか (F その) 初めて来た人が:えっと:何人だっけな。 | | | | |
| 446.1 | 446.3 | 慎吾 | うん。 | | | | |

上の断片1で示される夫婦の会話において、下線部の「定例会じゃないけど:」という妻（理奈子）の発話は、後続する「毎回やって:」以降で説明される内容があたかも「定例会」のようであることを示唆するものと考えられる。と同時に、発話者である理奈子にとっては、仮に「定例会」と言い切ってしまうと「規則的に開催される」という含意が生まれてしまうことを避ける必要が生じている。その結果、その含意を否定するというアナロジーの否定的側面がプロファイルされた否定的直喩標識が用いられている。

前節では書き言葉の《Xではないが、Y》という構文スキーマが「譲歩」と「比喩」の連続性を示す可能性を指摘したが、談話においてはさらにヘッジ表現との共通性が感じられる点が興味深い。「ヘッジ (hedges)」とは「暗黙のうちにその意味が曖昧さに関与するような語、事柄をより曖昧にしたり、もしくはより曖昧でなくしたりする機能を持つ語」(Lakoff 1973: 471)であるとされ、本来は命題の意味を曖昧にしたり (e.g. *sort of*)、その逆に明確にしたりする表現 (e.g. *strictly speaking*) であったが、認知語用論的な観点からは、事態と話者との間の関係を調節する機能から、話者と聴者との対人関係の調節へと拡張されたものであると考えられている (崎田・岡本 2005: 198)。それに従えば、断片1での「定例会じゃないけど:」は話し手である妻がこれから説明しようとする内容を、聞き手である夫にとって理解しやすいものにするために用いられていると考えるのが妥当である。言い換えれば、「厳密に言えば (*strictly speaking*)」 $X \neq Y$ であるが、わかりやすく言えば $X \approx Y$ 「のような (*sort of*)」ものであるという、アナロジーの本質的な両義性を表現するために「じゃないけど」という否定的直喩標識が用いられているのである。

4.2. 断片2: 「橋本環奈じゃないけど」

T001_011 (2583.5-2611.4) 喫茶店で妻・友人夫婦と食後のお茶をしながら (4名)

| | | | | | | | |
|--------|--------|----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------|--------|----|---------------------------|
| 2583.5 | 2594.2 | 新田 | でちょうどこの(0.364)ジグザグじゃない なってゆうのは(0.569)(F あの)(.)そこ の時に:(1.04) (F その)(1.419)圧力が大きい から:(0.67)英雄が生まれるわけ:。 | 2601.5 | 2602.1 | 洋平 | うーん。 |
| | | | | 2604.4 | 2605.5 | 千秋 | うーん。 |
| | | | | 2604.6 | 2605.5 | 優香 | うーん。 |
| | | | | 2604.8 | 2605.7 | 新田 | (L) |
| 2594.2 | 2594.6 | 千秋 | うん。 | 2604.8 | 2606.0 | 洋平 | うーん。 |
| 2594.3 | 2594.9 | 洋平 | うーん。 | 2605.5 | 2606.2 | 千秋 | うん うん。 |
| 2594.7 | 2597.9 | 新田 | 圧力が大きくなかったら:(0.266)英雄は生ま れないわけ:。 | 2605.7 | 2607.2 | 新田 | (L 橋本環奈じゃないけど)。 |
| | | | | 2606.7 | 2607.5 | 優香 | (L) |
| 2596.5 | 2597.1 | 千秋 | うん。 | 2606.7 | 2607.6 | 千秋 | (L) |
| 2596.6 | 2596.8 | 洋平 | うん。 | 2607.0 | 2608.0 | 洋平 | (L) |
| 2597.8 | 2598.3 | 千秋 | うん。 | 2607.2 | 2608.1 | 新田 | (L) |
| 2598.0 | 2598.7 | 洋平 | うーん。 | 2607.5 | 2608.1 | 優香 | うん うん。 |
| 2598.2 | 2604.8 | 新田 | そうゆう別の波が(0.228)いろんな種類の (0.102)ものがある:(0.241)それが 相まった時に:(0.299)千年に一人なの(L か:) | 2607.6 | 2609.0 | 千秋 | (L うん うん うん)。 |
| | | | | 2608.1 | 2611.4 | 新田 | そうゆう:地点がたぶんあるんじゃないか な。 |

断片2では、下線部の「橋本環奈じゃないけど」という否定的直喩標識が、先行する「千年に一人なのか」という表現が美少女アイドルとして知られる橋本環奈のキャッチフレーズだったことを想起させる方略として用いられている。転記テキスト中の(L)というタグで示されている通り、この発話自体を話者が笑いながら話しており、それを受けて聞き手も全員が笑っていることから、あくまで《冗談》であることを明示するための否定的標識として機能していると考えられる。

ここで着目したいのは、いわゆる照応に前方照応と後方照応があるように、否定的直喩標識が、断片1のような後続する内容に対する「前置き」のヘッジ表現としてだけではなく、先行する内容に対しても、それをどのように理解されるべきかを示す「フレーミング (framing)」の機能を

持つことである (Goffman 1974; 岡本 2016)。つまり、談話における否定的直喩標識はその生起位置に拘らず、メタ・コミュニケーション的な機能を持ちうる事が分かる。ここで、先述した《直喩によって類似性が設定される》という佐藤 (1978) の主張を思い起こせば、断片2における否定的直喩標識は、認知的レベルでXとYの類似性を設定するのみならず、さらにそうした見立て自体が相互行為レベルにおいて《冗談》というコンテキスト化を行っており、いわば認知と相互行為の双方が関与する重層的な方略となっているのである。

4.3. 断片3：「ランチじゃないけど」

S001_018 (1809.8-1835.1) 職場のテニスクラブで会員2人とイベント企画の相談 (3名)

| | | | | | | | |
|--------|--------|----|-------------------------------------------------------------------------------|--------|--------|----|-----------------------------------------------------------------------|
| 1809.8 | 1809.9 | 浜野 | あっ。 | 1823.1 | 1823.5 | 健 | そっか。 |
| 1810.2 | 1814.8 | 浜野 | そしたらさ その時にほら(0.149)(R 小沢)さ んの(0.129)ちょっと ころ(0.17)焼 き菓子とかを(0.353)(F あの)。 | 1823.5 | 1824.8 | 健 | (R 小沢)さんに発注して:。 |
| 1814.2 | 1814.3 | 堀江 | ね。 | 1824.7 | 1825.3 | 浜野 | そう (G そう そ) (G そう そ) (G そう そ)。 |
| 1814.3 | 1815.5 | 堀江 | あたし そう思ってた。 | 1825.0 | 1825.3 | 堀江 | (L) |
| 1815.3 | 1816.1 | 健 | あー。 | 1825.3 | 1826.1 | 堀江 | (L ちゃんとね)。 |
| 1815.7 | 1818.3 | 堀江 | パンとかさ: 売ったらいいのになって思っ ちゃった。 | 1825.3 | 1827.8 | 浜野 | だから そうゆうのを (D ン) (W コ ころ) (G まあ ま)(D ン)ランチじゃないけど。 |
| 1816.2 | 1816.6 | 浜野 | そう (G そう そ)。 | 1826.1 | 1826.5 | 健 | うん。 |
| 1816.6 | 1817.1 | 浜野 | そうゆうのを。 | 1827.6 | 1828.2 | 堀江 | うーん。 |
| 1817.4 | 1817.7 | 浜野 | うん。 | 1827.9 | 1830.1 | 浜野 | ちょっところ(0.463)お菓子付きみたい(L な ので)。 |
| 1818.0 | 1820.2 | 浜野 | (F あの:)(0.143)ほんとに ころ(0.3)ちょっ と(0.193)(D フ)。 | 1830.1 | 1834.0 | 浜野 | で (F その) それで:(0.147)ちょっところ (0.229)(F あの)(0.106)プラス百円ぐらい乗 せちゃって。 |
| 1819.4 | 1820.2 | 堀江 | うーん。 | 1830.1 | 1831.0 | 堀江 | あったね:。 |
| 1820.5 | 1820.6 | 浜野 | ん。 | 1831.0 | 1831.5 | 堀江 | うーん。 |
| 1820.6 | 1820.8 | 浜野 | ね。 | 1831.1 | 1831.3 | 健 | あ。 |
| 1821.7 | 1821.9 | 浜野 | (T うん)。 | 1831.4 | 1832.0 | 健 | なるほど。 |
| 1822.5 | 1822.7 | 浜野 | (W ン なん)か。 | 1833.7 | 1835.1 | 健 | それはいいかもしない。 |

断片3では、会話の場に不在の「小沢さん」というお菓子作りが上手なメンバーに発注して、パンや焼き菓子を「ランチ」のようにセット販売することを提案するために「ランチじゃないけど」という否定的直喩標識が用いられている。この例で注目されるのは、この否定的直喩標識に後続する形で「お菓子付きみたいなので」という通常の直喩標識が用いられていることである。先述したフレーミングの観点から考察すると、まず最初に否定的直喩標識で大きなフレームを設定し、さらに（肯定的）直喩標識でより小さく正確なフレームを設定するという段階性が認められる。

こうした「段階的フレーミング」が実現可能なのは、否定的直喩標識が「類似」よりも「相違」を前景化する機能を持ちながら、それと同時に、アナロジーとして類似性や共通性を設定するという特質に由来する。通常の直喩表現ではXとYの類似性が前景化するため、Yを喩えるのに最もふさわしいXを選択することで最適なアナロジーが可能となるが、現実の日常会話において話者がそうしたXを常に容易に思い出すことができるわけではない。そのため、言い直しや言いよどみ、修復などで自身の発話を動的に修正することで対処するのと同様に、まず、類似性は十分ではないが聞き手に理解可能なXについて「Xじゃないけど」と否定的直喩標識を用いて暫定的なアナロジーを構築したのち、より適切なX'を想起した時点で「X'みたいな」という（肯定的）直喩標識を用いてアナロジーを精緻化していると推察される。つまり、反省や推敲が可能な書き言葉では見えにくくなっている話者の動的な認知プロセスが、談話におけるアナロジーの修正・更新作業として可視化されているのがこの「段階的フレーミング」なのである。

4.4. 断片4：「百人の村じゃないけど」／「IMFじゃないけど」

T001_011 (1941.6-2076.9) 喫茶店で妻・友人夫婦と食後のお茶をしながら (4名)

| | | | |
|--------|--------|----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1941.6 | 1944.9 | 新田 | なんか(0.188)(W (D コ) コモンズ)(.)コモンズの悲劇って聞いたことある？。 |
| 1945.0 | 1945.5 | 洋平 | 知らない。 |
| 1946.0 | 1952.1 | 新田 | コモンズってゆうのは:(0.141)(F あの:) 共通の所有物(0.604)共通の所有物のことを(0.121)コモンズってゆって。 |
| 1952.2 | 1953.2 | 洋平 | うーん。 |
| 1953.0 | 1955.5 | 新田 | でそれを:(0.395)シェアしようとするん。 |
| 1955.7 | 1956.6 | 洋平 | うん。うん。うん。 |
| 1956.2 | 1959.9 | 新田 | でも:(0.904)(F あの:)(0.496)百人の村じゃないけど。 |
| 1960.0 | 1960.3 | 優香 | うん。 |
| 1960.0 | 1960.4 | 洋平 | うん。 |
| 1960.2 | 1972.9 | 新田 | 地球があって(.) (F あの:)(1.49)奪い合っちゃうから:(0.519)結局:(0.352)最初は(0.141)例えばだけでも最初は:(0.411)みんなのために僕が(0.796)全部買うよって:(0.34)もらうんだけど。 |
| 1961.0 | 1961.6 | 千秋 | うーん。 |
| 1961.0 | 1961.4 | 洋平 | うん。 |
| 1964.5 | 1964.8 | 洋平 | うん。 |
| 1964.5 | 1965.1 | 千秋 | うーん。 |
| 1967.4 | 1968.0 | 洋平 | うん。 |
| 1971.8 | 1972.0 | 洋平 | うん。 |
| 1972.9 | 1977.1 | 新田 | そのうち:(0.49)既得権益者になっちゃうみたいないなケースがあったりもすんだ。 |
| 1972.9 | 1973.2 | 洋平 | うん。 |
| 1976.7 | 1976.8 | 洋平 | ん？。 |
| 1977.1 | 1978.7 | 新田 | 既得権益者に 権益者。 |
| 1979.1 | 1979.5 | 洋平 | うーん。 |
| 1979.3 | 1988.6 | 新田 | を持つてる(0.235)みんなのために持つ(0.119)はずが(0.547)いつの間にか(0.458)(F あの)(0.768)権利(0.137)として振りかざすようになってしまうケースが出てきたりだとか。 |
| 1982.1 | 1982.4 | 洋平 | うん。 |
| 1985.6 | 1985.9 | 洋平 | うん。 |
| 1987.3 | 1988.4 | 千秋 | うーん。 |
| 1988.3 | 1989.2 | 洋平 | あー。 |

| | | | |
|--------|--------|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1989.3 | 1993.4 | 新田 | (F あーの) もっと(D フ)ひどいことをゆうと(0.276)(F あーの)(0.119)IMFじゃないけど。 |
| 1991.2 | 1991.5 | 洋平 | うん。 |
| 1993.5 | 1997.8 | 新田 | (F あの)(1.746)侵略の:歴史も全部そうなんだけど。 |
| 1997.0 | 1997.2 | 洋平 | うん。 |
| 1997.8 | 1998.0 | 洋平 | うん。 |
| 1998.5 | 2003.7 | 新田 | 要は(0.155)一番その国が:(0.443)得られたらまずいだろうなってものを奪うわけよね。 |
| 2000.5 | 2000.8 | 洋平 | うん。 |
| 2002.3 | 2002.9 | 優香 | うん うん。 |
| 2002.9 | 2003.2 | 洋平 | うん。 |
| 2003.7 | 2004.5 | 優香 | うん うん うん。 |
| 2004.2 | 2004.5 | 洋平 | うん。 |
| 2005.1 | 2009.1 | 新田 | で そのあとに(0.136)そこから侵攻して行くってゆう(0.461)ものがいっぱいあって。(D ヒー)(0.195)例えば(0.163)(F あの)(0.177)フィリピンだとか:(0.515)いくつかの(0.31)(F あの)(0.177)東ティモールだったかな いくつかの(0.231)島:(0.258)で(0.464)(D シ)起こるのが(0.115)資源が足りないか 特に水資源が足りないから(0.603)ってゆって。 |
| 2023.4 | 2035.1 | 新田 | でもただでさえ(D ミ)貧しいのに:(0.468)(F その) そこに(0.657)お金(0.209)(D アガ)(D アガ) 与えるから:(0.501)(F その) 多国籍の:(0.685)(W (U ユーツ))(U 技術)がある:(0.222)水:管理会社を入れてくださいと。 |
| 2035.0 | 2036.1 | 優香 | うん うん うん。 |
| 2035.7 | 2039.5 | 新田 | あー お金借りられんの ありがとう つって(0.153)水管理会社に管理させるん。 |
| 2040.6 | 2051.2 | 新田 | で そこが(0.186)全部牛耳るもんだから:(1.055)水の:料金が(0.222)いつの間にか:(0.263)リッター十円だったのが:(0.252)リッター百円なって:(0.333)段々 段々高くなっていて。 |
| 2049.2 | 2049.5 | 千秋 | うん。 |
| 2051.3 | 2061.3 | 新田 | しかも(0.266)メンテナンス (D ノ) もずさんだから:(0.63)(F あの)(0.382)錆びてるだとか:(0.185)(F あの) (L (X # # #))(0.291)ばい菌があるような水も飲まされるみたい(0.701)歴史があるんだよ。 |
| 2055.7 | 2056.4 | 優香 | うーん。 |
| 2055.8 | 2056.0 | 千秋 | うん。 |
| 2061.4 | 2062.0 | 千秋 | うーん。 |

断片4は断片2と同じ会話場面であり、友人同士の二組の夫婦のうちの片方の夫（新田）がほぼひとりでターンを独占して語っているシーンである。彼の長い語りの中で否定的直喩標識と思われるのは「百人の村じゃないけど」と「IMFじゃないけど」であるが、いずれも「Xじゃないけど…」で一つのトピックに関するフレーミングが開始し、「Yみたいな～」という直喩標識でフレーミングが終了している（転記テキスト中の点線で囲まれたグレーの部分が生トピックの境界を示している）。このことから、前項で述べた否定的直喩標識と肯定的直喩標識による「段階的フ

まず1点目は、小説などの書き言葉よりも日常会話において否定的直喩標識が用いられやすい傾向にあるということである。小説などの文学作品に限った傾向である可能性もあるが、本研究で焦点を当てた否定的直喩標識「ではないが」は、書き言葉では「譲歩」の意味で用いられることが多く、「比喩」の意味として解される事例はそれほど多くない。しかしながら、《Xではないが、Y》という構文スキーマを仮定すると、これから述べる内容(Y)に類似しているもの(X)を否定することで、読み手や聞き手の推論を先回りして述べるという動機づけが存在していると捉えられる譲歩表現も存在する。したがって、否定的直喩標識に基づく「比喩」は「譲歩」と連続性があり、いずれも解釈する側の推論を書き手や語り手が先取りしようとするコミュニケーションの他者志向性が基盤となっている。

2点目として、談話における否定的直喩標識が当該発話を《冗談》としてコンテクスト化することが可能であることから、メタ・コミュニケーション的な機能を持ちうるということが分かった。このとき、認知レベルでの類似性の設定に加えて、そうした見立て自体が相互行為レベルでのコンテクスト化を実現しており、認知と相互行為の双方が関与する重層的な方略として否定的直喩標識が利用可能であることが明らかとなった。

3点目として、日常会話においては、否定的直喩標識「じゃないけど」を含む発話に対して（肯定的）直喩標識「みたいな」を伴った表現が後続する場合はしばしば観察されることが挙げられる。これは、否定的直喩標識を用いた暫定的なアナロジーを、通常の直喩標識で精緻化しようとする「段階的フレーミング」として二種類の直喩標識が使い分けられている可能性を示すものである。この点は、事前に反省や推敲が可能な書き言葉と、話者がリアルタイムで動的に自身の認知プロセスや言語化プロセスを更新し続ける話し言葉との大きな違いであると言える。また、この二種類の直喩標識の使い分けによってフレーミングの開始と終了を指標している事例も存在することから、これもまた、認知レベルと相互行為レベルにまたがった重層的な方略として捉えられることを示唆している。

最後の4点目として、談話における直喩とヘッジ表現、例示とのあいだに連続性が認められることが明らかとなった。その結果、これまで比喩表現との関連性が言及されることのなかった談話レベルの言語現象との相互関係や近接性を解明する必要性が強く示唆された。

6. おわりに

本稿では、書き言葉と話し言葉における直喩標識の振る舞いの差異の観察から、書き手ないしは話し手がどのような動機づけのもとにそうした「否定的直喩標識」を用いるのかを検討した。結論として、喩えるものと喩えられるものとの「類似」と「相違」からなるアナロジーの本質的な両義性を表現するために「じゃないけど（ではないが）」という否定的直喩標識が用いられていることが明らかとなり、直喩に関してこれまであまり指摘されることのなかった数多くの論点が導き出された。比喩表現の基盤となるアナロジーのこうした両義性は狭義の「隠喩」では観察されにくく、明示的な指標を持つ「直喩」を観察することで初めて浮かび上がる。また、アナロジーが動的に構築され更新されるプロセスを解明するためには、書き言葉だけではなく話し言葉の観察が必要である。そうした背景のもと本研究は、一見すると周辺事例に過ぎないと考えられる「否定的直喩標識」の観察を通じて、認知と相互行為が織りなす「コミュニケーション」現象として比喩の動態を分析することの意義を一端でも示すことができたと思える。

注

1. シネクドキとメタファーの相互関係にも関わるためここではこれ以上踏み込まないが、本件についての筆者の考えについては崎田・岡本(2010)の5.2節を参照されたい。
2. 転記テキスト内の太字・下線部は引用者によるものである。転記記号およびデータの詳細については開発者による以下のサイトを参照のこと：<https://pj.ninjal.ac.jp/conversation/cejc-monitor/transcript.html>

参考文献

- Aisenman, R. A. 1999. "Structure-Mapping and the Simile – Metaphor Preference." *Metaphor and Symbol*, 14, pp. 45-51.
- Becker, L. C. 1973. "Analogy in Legal Reasoning," *Ethics*, 83(3), pp. 248-255.
- Goffman, E. 1974. *Frame Analysis*. Cambridge: Harvard University Press.
- Holyoak, K. J. and Thagard, P. 1995. *Mental Leaps: Analogy in Creative Thought*. Cambridge, MA: MIT Press. (鈴木宏昭・河原哲雄(監訳) 1998. 『アナロジーの力』, 東京: 新曜社)
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉. 2019a. 「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の設計と特徴」, 『言語処理学会第25回年次大会発表論文集』, pp. 367-370.
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉. 2019b. 「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版 コーパスの設計と特徴」, 『国語研究所日常会話コーパスプロジェクト報告書』 3.
- 小松原哲太・田丸歩実. 2019. 「日本語における直喩の写像方略の類型」, 『日本認知言語学会論文集』, 19, pp. 37-49.
- Lakoff, G. 1973. "Hedges: A Study in Meaning Criteria and the Logic of Fuzzy Concepts," *Journal of Philosophical Logic*, 2(4), pp. 458-508.
- Lakoff, G. and Johnson, M. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 鍋島弘治朗. 2017. 『メタファーと身体性』, 東京: ひつじ書房.
- 中村明. 1977. 『比喩表現の理論と分類』国立国語研究所報告 57, 東京: 秀英出版.
- 中村明. 1991. 『日本語レトリックの体系』, 東京: 岩波書店.
- 岡本雅史. 2016. 「コミュニケーションの「場」を多層化すること—メタ・コミュニケーション概念の認知語用論的再検討—」, 『社会言語科学』, 19(1), pp. 38-53.
- 岡本雅史. 2019. 「聞き手行動が孕む二重の他者指向性—漫才のツッコミから見る聞き手行動研究の射程」, 村田和代(編) 『聞き手行動のコミュニケーション学』, pp. 59-88, 東京: ひつじ書房.
- 崎田智子・岡本雅史. 2010. 『言語運用のダイナミズム—認知語用論のアプローチ』, 東京: 研究社出版.
- 佐藤信夫. 1978. 『レトリック感覚』, 東京: 講談社.
- 山梨正明. 1988. 『比喩と理解』, 東京: 東京大学出版会.

<Abstract>

“*Janaikedo*” as a Simile Marker:
Reconsidering the Connection between Metaphor and Analogy in Discourse

Masashi Okamoto (Ritsumeikan University)

From the traditional view of cognitive linguistics, similes are perceived as having a common cognitive mechanism with metaphors under the name of “conceptual metaphor” as a cognitive process, and there is not so much opportunity to question their specificity. However, there are some crucial aspects which could be lost when grasping similes and metaphors under dichotomy. One of them is the negative aspect of *analogy* itself, which is the cognitive process underlying metaphorical mapping. In other words, the cognitive process of comparing X to Y focuses on the similarity and commonality of X and Y, but such a process is based on the presupposition that X and Y are *not* identical. Arguments based on metaphorical mappings often overestimate the similarities between the source domain and the target domain, while they underestimate the potential negativity of analogy.

From this perspective, this paper looks at how negative aspects of analogy are verbalized by focusing on “*janaikedo*,” a negative simile marker in Japanese. Our purpose is to make it clear what is the cognitive and communicative basis on which such negative aspects are profiled, by analyzing the discourse sequence of actual everyday conversation of Japanese ordinary people.

As a result of the analysis, the following are revealed; 1) the negative simile marker (NSM) is more likely to be used in everyday conversations than in written words such as novels, and 2) NSM in discourse is often followed by a positive simile marker “*mitaina*.” Furthermore, 3) simile markers and hedge expressions have something in common in discourse. Those findings suggest that the motivation and production of metaphorical expressions should be highly related to their communicative environment.